

2007

draw CHK.

9709

部
多
人
少
毛

武藏

軍艦武藏

菲島沖海戦 (捷號作戦)

武藏戦闘詳報

昭和十九年十月二日

軍機

武藏機密第三號

上
14

表紙等十四枚

用済後焼却

軍艦武藏戦闘詳報 第四號

菲島沖海戦（捷號作戦）

昭和十九年十月二十四日自一九三五

菲島「ミンドロ」島東方海西

一 戦闘開始時迄ノ一般情勢

捷號作戦發動セラレ急遽燃料補給ヲ了シ十月二十日ハ「ラルネー」

泊地發第一遊撃部隊一艦トシテ北上中二十日朝遭難シタル軍艦摩

耶乘員ヲ同日午後驅逐艦秋霜ヨリ移乗セン「ミンドロ」島南ヲ迂回シ

二十四日早朝同島東方海面ヲ概ネ七〇度ノ針路ニテ警戒航行ス

航行序列大和（P/B）（P/S）ヲ中心艦トシテ第一部隊金剛（P/S）ヲ中

心艦トシテ第二部隊順三ヲ武藏ハ第一部隊輪型陣中右後方ニ占

位シ在リ



文蔵

是ヨリ先南西方面艦隊ヨリ二十四日早朝「ルソン」地区空襲、豫報アリタルヲ以テ五三〇統員ヲ戦闘部署ニ就ケ警戒ヲ嚴メス。六三〇豫期、如ク敵機「B-2C」及「TB-9」各二機ヲ九〇度四〇分「F-6」四機ヲ一九五度四〇分「F-4」ヲ發見ス。戦闘開始前「サイレン」外一切補助蒸氣ヲ停止シ可燃物處理應急用水準備、艦内閉鎖等心算リ無キ迄ニ整備ス。便乗中、軍艦摩耶乘員、夫々固有戦闘配置ニ應ジ本艦戦闘力ヲ增強ス。配備ニ就キ在リタリ。

二 戦闘實施施 (記録七矢ニ付時刻推定シモヲ記入ス)

時刻	主	要	記	事
一〇〇頃	(第一次空襲)	來襲機數十七機	擊墜機數四機	(内不確實一機)
	偵測真方位二〇度	二五分飛行機四機	以上大編隊ヲ探知	一方
	真方位二〇度	高角二五度	六分「B-1」二機	近接シ「F-4」ヲ雲間ヨリ

リ發見水艦、左艦尾ヨリ左六五度方向六。料遠去リ見失フ。
 爾後目測四五料ニ敵機四。機ヲ發見シ間キク右正横上空密雲中
 一見失フ。當時上空ニ六卷積雲アリテ敵機發見ハ至難ノ狀況ナリ。
 右舷雲間至近距離ヨリ本艦ヲ急襲ス

一〇二五 敵機ニ對シ射撃開始

右舷艦首方向及右舷艦尾方向ヨリ同時ニ急降下爆撃投彈ス。
 至近爆彈四アリ。艦首右舷ニ五番ビーム及左舷ニ〇番ビーム艦中火
 函舷各一四五番ビーム各一彈。艦首水線下海水ス。

一番砲塔天蓋ニ大。料程度爆彈命中モ何等被傷ナシ。

一〇二七 右舷ヨリ雷撃機三機魚雷發射一四。番ビーム一五。番ビーム附近ニ

見タル雷跡下モ艦底通過一三。番ビーム魚雷一本命中右舷約五
 五度傾斜ス。第七。第九。第十。右側隔壁銃數本弛緩一本脱落
 輕微ニ漏水ス。注排水操作放棄、如ク直ニ右舷ニ五度迄傾斜

三式

ヲ復原シ次ヲ右へ一度迄復原ス
魚雷命中ノ激動ニ依リ主砲前部方位盤旋回不能ナル
敵機ノ機銃掃射ニ依リ第一機銃部指揮官海軍少尉星岡藏戦
死ス

(第三次空襲)

米襲撃機数 一六機
撃墜機数 七機

電測真方位一〇〇度九〇ノ料ニ飛行機群ヲ探知約十分後真方位一〇〇
度五〇ノ料左ニ進ムトTBF三機SB二機F六機F六機四機ヲ後
見ス更ニ約十分後敵機六機列ニテ攻撃態勢ニ移レリSB二機
ハ巻雲ヲ利用シ艦首及艦尾ヨリ急降下爆撃投弾トTBF三機
四機左正横一料附近ヨリ緩降下四〇〇米附近ニ雷撃ヲ雷撃機ハ
六機魚雷一本左舷ヲ艦首通過一本左舷ヲ艦尾通過魚雷三本
命中左舷八。番中ム一二。番中ム一四五番中ム八。番左

十一
二
四
五

約五度傾斜第二水壓機室ニ浸水ニ遮防ス

直撃爆彈二個(二五〇駐程度ノモト認ム)アリ

左舷一五番ヒーム前部兵員厠ヲ破壊シ左艦首ニマクシラ生ス

左舷三八番ヒーム四番高角砲左前方ニ爆彈命中最上甲板(上甲板

ヲ貫通シ中甲板第十兵員室(機材工場左方左舷内機室上方)ニテ

炸裂第二機材室ニ火焰侵入シ同室上方ノパイレン蒸氣管及第三

機材室ニ蒸氣管ノ一部ヲ彈片ニ依リ破壊シ蒸氣噴出熱氣充滿シ

為左凶曲誘轉(操縦命閉鎖)ニ處置ヲ執リ運轉指揮所ヲ第一機

材室ニ移轉シ三軸運轉トス第十室ニ火焰侵入鏡ヲ閉鎖不能

第十三室風路破壊火焰侵入熱氣為汽釀繼續不能入口附近火

災上部隔壁破壊倒リ掛リ防水蓋ヲ下リ窓開不能トナレ

至近爆彈五個左舷七〇番ヒーム一個右舷五〇番ヒーム乃至六〇番

ヒーム四個傾斜ハ直ニ復原シ左約三度直直シ次ニ右一一度トス

「トリム」変化量ハミ米ニテ前「トリム」一米トナル（戦闘開始前以後
「トリム」一米ナリ）

（第三次空襲）

來襲機數 一三機
墜機數 五機（不確實三機）

電測真方位一三〇度九〇ノノ飛行機部ヲ探知約五分後真方位一三〇
度四五ノノ戦爆雷聯合一機ノ編隊ヲ發見何レモ本艦右艦尾
方向近接シツツ攻撃態勢ヲトリ内一三機本艦ニ來襲ス

「S.B.S.C」ハ巻雲ヲ利用シツツ艦首尾方向ヨリ急降下爆撃投彈

「T.B.F」ハ右正横附近ヨリ緩降下雷撃ナス

魚雷一本右舷大〇番ビーム命中測程儀室測深儀室破壊前部戦
時治療室〇瓦斯充満ノ為在室ニ耐ヘズ中毒患者多數發生ス
前部應急班指揮官海軍少尉佐々木弥格〇瓦斯中毒ノ為戦闘
力ヲ失フ

魚雷一本右舷より艦首通過

至近爆弾七舷八番ビームに弾あり後部機銃部指揮官海軍少尉金
並久雄及兵一名此ノ爆風為最上甲板機銃部指揮所より吹飛ハ
サレ飛行機格納庫内ニ轉落シ兵八重傷後戦死セシモ同少尉ノ奇蹟
的ニ無事ナリ艦尾至近爆弾一個アリ其弾花ニシテフレートニ火柱ニア
リ經テ五握ノ破孔ヲ生ジシニフレートニ鋼索ヲ破損ス

(第四次空襲)

未襲敵機二の機

撃墜機数八の機(内不確実三機)

一一三

真方位九〇度六〇分ニ敵爆雷聯合約三機飛行機部ヲ發見捕捉ス

敵機ハ解列來襲シS B C 約四機右艦首方向ヨリ太陽ヲ利用シ急降

下ニ移レリ同時ニT B F 四機右正横ヨリ緩降下低空爆撃ノ如ク見テ

モ實ニ雷撃ナリ次ニ左舷ヨリ雷撃機四機來襲ス

一一五三 魚雷四本命中

右舷七番ヒーム及左舷七番ヒーム各一本命中、既ニ艦前部ハ中甲板
 迄浸水シ在リシ處、本被雷艦ヲ更ニ沈下シ前トリム向米トナル
 トリム修正ヲ行フ。右舷二番ヒーム魚雷命中、アトリー内異狀ヲ認メズ
 右舷一三番ヒーム魚雷命中ニ依リ、第三次空襲時右舷一三番ヒーム魚雷
 命中ノ際行ヒシ第三次却室及水壓管通路ヲ止ムル補強ハ全部脱落シ、
 ニ電線通路隔壁約三寸程膨ミ、第三次防禦指揮所入口側壁ニテ浸水
 セリ以テ防禦指揮官内務長海軍大佐エ藤計ハ部下ヲ指揮シテ直
 ニ浸水遮防應急通信應急照明ニ依リ、第三次防禦指揮所ヲ引續キ踏
 ミ止マリ防禦指揮ニ任ズ。魚雷右外右舷ヨリ艦尾通過一本左舷ヨリ
 艦尾通過一本左舷一三番ヒーム(艦橋直下)附近艦底通過二本
 直撃爆彈四個
 左舷四五番ヒーム(一番昇降口附近)左舷大五番ヒーム左舷七番ヒーム
 ニ各一個附近破壊火災ナシ前部ニ在リシ應急員殆ト全部戦死

右舷三五番ヒール副業事務室内於テ炸裂附近破壊火災ナシ
第四次被害ニ依リ右傾斜ス右舷排水ニ依リ傾斜度迄復原ス

(第五次空襲)

近接ニ敵機ニ〇機(来襲機数〇)
撃墜機数五機

右正横ヨリ敵機編隊ヲ發見主砲高角砲射撃右舷火和襲
撃運動中雷撃機ヲ射撃シ五機ヲ撃墜ス本艦ニ遠來襲セズ

一三一五

(第六次空襲)

来襲機数 七五機
撃墜機数 一六機(可不明機〇機)

壓測算方位一〇〇度ノ行ニ飛行機ノ大編隊ヲ探知右四〇度六〇
料ニ數爆雷聯合約四〇機ノ編隊ヲ發見爾後ニ像ニ介離セリ
同時ニ左一三〇度四〇料ニ同様約二五機ノ編隊ヲ發見更ニ左
一四五度三五料ニ五機ノ編隊ヲ發見敵機本艦ニ
射撃せず如態勢ヲ整ヘテ迂回シ本艦全周ヨリ包圍襲撃ス

一四四五

一五二一

敵機來襲甚大、被撃つ後、明瞭ナルモ、魚雷命中一、本直撃爆
彈一個、至近爆彈六個、シテ水柱林立、爆煙砲煙、全艦ヲ包ミ、敵情判
然クラサル所アリ、命中セザリシ魚雷爆彈多数アリシモノト認ム

(一) 防空指揮所右舷ニ命中セル爆彈、第一艦橋ヲ炸裂、防空指揮所右舷ヲ吹
キ飛ビ、第一艦橋及作戰室ヲ大破、第一艦橋小火災、備付トラスム、防
火用水ヲ直ニ消火ス、防空指揮所ニ於テ艦長海軍少將猪口敏年
右肩部重傷、高射長海軍少佐廣瀬榮助、測的長兼先任艦長
附海軍大尉山田武男、戦死

第一艦橋於テ航海長海軍大佐假屋真、航海長海軍少尉福田
靖、通信士海軍少尉奥田聰、電測士海軍少尉水谷芳男、戦
闘記録員(庶務主任)海軍主計少尉中村和夫、飛行科介隊長
海軍少尉寺本武敏、掌航海長海軍兵曹長吉田忠長、戦死
作戰艦於テ摩耶副長海軍中佐永井貞三、摩耶醫務科介隊長

士海軍軍醫大尉薄場有戦死
 本爆弾ニ依ル戦死傷者数左ノ通

場所	戦死傷者	
	戦死	傷者
防空指揮所及附近	二	一
第一艦橋甲板	七	八
作戦室甲板	摩耶二	二
計	一一	一一

(一) 左舷一〇五番ヒム (二) 左舷一五番ヒム (三) 左舷二五番ヒム (四) 左舷三〇番ヒムニ於テ同時ニ命
 中ニ爆弾ハ上甲板ニ炸裂單装ニ四番機銃特設ニ番聯裝機銃通信
 指揮室第一受信室及電話室ヲ破壊第四第八缶室ニ火焰侵入
 暗號士海軍少尉稻葉稔一同海軍少尉河面正雄掌通信長
 海軍少尉下田善造戦死

次(五)右舷一五番ヒム艦長昇降口附近爆彈一個命中、單裝一三番
 機銃特設一聯裝機銃破壊、第七番室入口前壁壓壞、同室入口扉ハ
 壓着セラレ、開閉不能、火災ナシ
 (六)一七番ヒム中央高射機待機所ニ命中、爆彈八同所ヲ飛散、旗
 甲板以下前檣樓後面大破、火災ナシ
 (八)左舷六二番ヒムニ命中、爆彈ハ上甲板第五兵員室ニ炸裂、中甲板
 病室及其附近ヲ大破、火災ナシ
 (九)一番主砲塔天蓋上六八番ヒムニ五〇野爆彈命中、天蓋甲銃徑
 約一〇糎深サ約二糎ヲ削リ去リ、砲室内天井ニ直接取付アル電燈全
 部落下、暗黒トナリタルニシテ、其他ニ何等被害ナシ
 (一〇)右舷七五番ヒムニ命中セル爆彈ハ士官室ニ炸裂、士官室司令部
 庶務室ヲ大破シ、最上甲板舷側ヨリ内方約二米、線七〇番ヒムヨリ九五
 番ヒム迄縦亀裂ヲ生ジ、最大亀裂ノ所ハ人員出入可能ノ程度ナリ

至近爆彈一個内譯右舷一三番ヒムヨリ一四の番ヒムヨリ間四個
一三の番ヒムヨリ一四の番ヒムヨリ間二個

(1) 左舷四の番ヒム (2) 左舷六の番ヒム (3) 左舷七五番ヒム魚雷各一本
命中 四號ヒルチポンフ空際時満水

(4) 右舷八の番ヒム (5) 右舷一五番ヒム魚雷各一本命中 右舷外側被
撃ヲ擴大是外装甲鉸肉部ニ特ニ異状ナシ

(6) (7) (8) (9) 魚雷被害ニ依リ艦首著シク沈下シ水柱撞撃及最上甲
板上ニ落下ス

(10) 左舷一五番ヒム魚雷一本命中 入室側壁鉄弛緩ニ漏水スルト共ニ附
近ニ落下セル爆彈ニ依リ入室ニ火焰熱氣侵入 (7) (8) 左舷四の番

ヒム魚雷三本命中 第一魚雷ニ装甲鉸ヲ壓入(開キシモノ如シ)
シ次ニ命中セル魚雷ハ不爆 儘左舷一五号機銃彈藥庫ニ本共共、

頭部ヲ突入シ環水ヲ擴大セリ 同彈藥庫眞ハ暗黒裡ニ應急照明ヲ使

用シテ目撃シタルモ浸水度防不能、為機智ヲ勵キン機銃揚彈藥筒ヨリ脱出ス

(10) 左舷四五番トムニ魚雷本命中第三次空襲時被害ニ依リ第四機銃室側壁膨出シアリシ處、本魚雷依リ側壁長サ約十米破レ同室約四分一後満水尚第一機銃室浸水ホシテ下部破孔ヲ止メ浸水ヲ始メ爾後一

軸運轉トナリ

(11) 左舷五六番トムニ魚雷本命中三番主砲塔彈庫左側壁貫通道風管破レ同室膝迄浸水シタルモ直ニ遮防、六番高角砲彈藥庫左舷中部側壁破レ同室及後部轉輪羅針儀室浸水、左邊水機室ニ漏水ハ以上第六空襲被害ニ依リ左約十度傾斜セテ取舵轉舵中ナリシ為左傾斜約六度ニ止マリ注排水ニ依リ約四度大傾斜ヲ復原シ得テ殘傾斜左六度トナリ、トリアハ前々四米ヨリ一擧ニ八米以上ナリ、艦首沈下シテ一番主砲塔左舷最上甲板一部浸濻状態トナレリ

第一艦橋爆彈被當依、艦長負傷、戦闘指揮所ヲ禁、艦橋ヲ移シ、一時副
 長海軍大佐加藤憲吉指揮ヲ執リ、通信長海軍中佐三浦徳四郎ヲシテ
 操艦ニ當ラシム。爾後各部應急處置ニ實施中ニ舵取機電源兩舷共断
 トナリ、取舵トシ度ニテ、トナリ應急處置ニ依リ、故障復旧約三十分後直接
 操舵可能トナレリ。暫クシテ艦長第ニ艦橋到リ、副長ヨリ受ケ継ギ直接
 戦闘指揮ヲ執ル。先ツ各部ノ被害状況ヲ調査シ、擧艦ニ心全カク以テ
 浸水遮防、傾斜復原ノ努力ニ此ノ頃傾斜及リテ漸次増加シツテ、クルヲ
 以テ最上甲板ノ重量物ヲ極力右舷ニ移動セシメ、左舷ニ錨ヲ海中ニ投棄
 セシメタルモ、依然トシテ増加スヲ以テ右舷後部ノ舷區ニ注水セシム。一方操舵初
 果ヲ大ナラシム為、艀尾左舷ヲ驅逐艦ニ曳航ニ準備ヲナリシム。
 之ヨリ先ニ左舷後部ニ驅逐艦共風ヲ横付シ、摩耶乘具(應急関係乗具)除
 及聯合艦隊法務長法務大佐由比喜久雄、第一艦隊法務官法務大
 尉皆川一郎ヲ移乗セシメタリ。

一九一五

傾斜漸次増加シ度ニ及ビテ以テ第三第七第七土生室ニ注水ヲ行シテ
シテ其効果顯著ナリ更ニ第三機械室ニ注水ヲ命ジタリ更ニ傾斜増加
シテ度ニ及ビ尚増加スルヲ認メ總員退去用意ヲ命ジ御寫真並ニ勅諭
奉遷手段ヲ構シ(船急ニ沈没ニ至ル途ニ中艦ト共ニ沈没ニ去ス)軍艦
旗ヲ降下ス

一九三〇

傾斜約三十度ニ至リ總員退去傾斜急激ニ増加シ轉覆ト同時連続
爆發ニ出アリ

一九三五

沈没
位置 東經一三二度三十分 北緯一三度七分 水深約八〇〇米
艦長、第二艦橋ニ於テ最後迄指揮ヲ執リ戦死(副長確認)

J司令官	武藏艦長	第一部隊 = 近寄リ
J司令官 (全剛)	第一部隊 (武藏艦長)	第一部隊、武藏、北方ニ在リテ警戒ニ任セヨ
司令官	武藏艦長	敵機、空襲状況ニ鑑ミ飛行又ハ以航可能ナル場合ハ附近ノ港ニ待避スルヲ淺瀬ニ乘リ上ケ適當ナル應急對策ヲ講セヨ
司令官	司令官 (武藏艦長)	武風、武藏艦長、指揮ヲ受ケ同艦、警戒ニ任セヨ
司令官	武藏艦長	積霜、武藏艦長、指揮ヲ受ケ同艦、警戒ニ任セヨ
司令官	武藏艦長 利根艦長	利根、武藏艦長、指揮ヲ受ケ同艦、警戒ニ任セヨ
司令官	利根艦長	利根、原隊ニ復歸セヨ

第六空襲後	武藏艦長	武藏艦長	武藏艦長	武藏艦長	武藏艦長
司令官	司令官	武藏艦長	武藏艦長	武藏艦長	司令官
現在、状況より戦力發揮不可能。摩耶乗員ヲ警	戒艦ニ移乗セシメ差支ナキヤ	本艦左舷後部ニ横付サレ度	人員移乗ナリ	摩耶乗員ヲ移乗セシム	今ノ状況ニ鑑ミ人員ヲ驅逐艦ニ移乗セシメ小官ハ最 後迄踏止マリ而シテ今後ノ重大ノ作戦ノ備ニ致度

四戰果及消耗彈藥數

項目	來襲		發射		擊墜		檢數	項目
	擊	彈	砲	砲	砲	砲		
第一次	一	七	四	〇	〇	四	(内不確実二)	第一次
第二次	一	六	一	七	九	七		第二次
第三次	一	三	四	三	一	五	(内不確実二)	第三次
第四次	一	〇	三	七	一	八	(内不確実三)	第四次
第五次	〇	〇	〇	七	七	五		第五次
第六次	七	五	四	一	〇	六	(内不確実二)	第六次
合計	一	一六	一三	一七	三三	四一	(内不確実五)	合計

九四式四十糧砲
消耗彈藥數細別

備考

九三式十三耗機銃	徹甲彈藥包	通常彈藥包	九六式二十五耗機銃	通常彈藥包	着魚雷彈藥包	突燒霰彈藥包	八九式十二種聯裝高角砲	九二式特限信管	零式通常彈	零式信管	三式燒霰彈
一五〇發	一五〇發	八八六八發	九〇九發	九〇九發	二〇八發	一八〇發	二〇三個	二〇三個	一〇三發	五四個	五四個
以跟通常彈藥包四型	以跟通常彈藥包四型	以跟通常彈藥包一型	九二式特限信管齒輪附改一	英流電氣火管四型	常裝藥	常裝藥	常裝藥	常裝藥	常裝藥	常裝藥	常裝藥
一五五八發	一五五八發	一四五五發	一三七個	一三七個	一三七個	一三七個	一〇三個	一〇三個	一〇三發	五四個	五四個

五
被

(1) 人員
准士官以上

普通彈藥包

八五〇發

成跟彈藥包

九五〇發

(2) 下士官兵備人

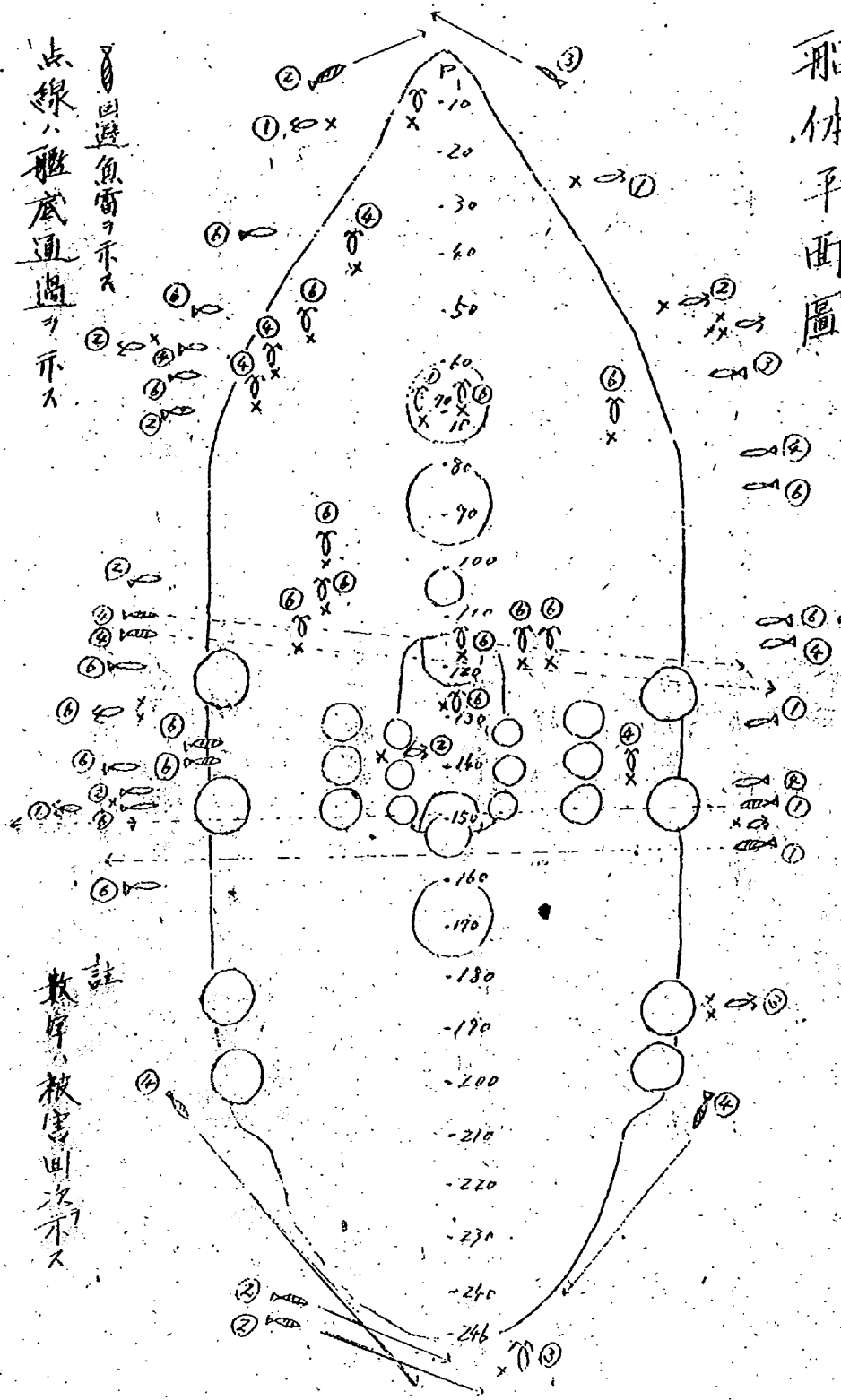
行方不明者	戦死者	生存者	出撃時	種別	行方不明者	戦死者	生存者	出撃時	種別
五五三	一七三	九〇八	六三四	兵科	七	七	三三	三七	士官
〇	一	一	二	飛行科	二	二	五	九	豫備士官
三	二	一四	一九	整備科	八	六	一九	三三	特務士官
一四五	二五	二八八	四一八	機附科	六	一	一六	三三	准士官
二一	一五	三三	六九	工作科	〇	〇	一	一一	計
〇	二	一六	一八	看護科	三	一六	二三	一一	長門
一七	一四	三九	七九	計科	〇	〇	一	一	摩耶
三	〇	五	八	備人	一	一	三	四	司令
七五三	三三三	三〇三	三二七	計	〇	〇	三	〇	其他
〇	〇	八	八	長門	〇	〇	〇	〇	記
〇	〇	〇	〇	摩耶	〇	〇	〇	〇	事
〇	〇	〇	〇	計	〇	〇	〇	〇	

(10)
 (11) 船体兵器表
 被害一覽表

彈近至		彈爆		雷魚		項目 回数
右舷	左舷	右舷	左舷	右舷	左舷	
F 25 F 145	F 20 F 145		F 70 (主砲火蓋)	F 130 (F 40, F 150) (船底通過)		第一次
F 30~F 60 x 4	F 70		F 15 F 138		F 80 F 110 F 145 (船底通過) (船底通過)	第二次
F 130x2 籠x1				F 60 (船底通過)		第三次
明	不	F 135	F 45 F 65 F 70	F 70 F 130 F 138 (船底通過)	F 70 (F 120x2) (船底通過) (船底通過)	第四次
						第五次
F 130~ F 140x4	F 130~ F 140x2	F 68 F 75 F 115x2 (船底通過) F 130 F 127	F 62 F 105 F 115 F 120	F 80 F 105	F 40 F 60 F 75 F 125 F 140x3 (142 x 3) F 145 F 165	第六次
13	5	7	10	7	13 (14, 2, 7, 15)	合
18		17		20		計

船体平面圖

点線ハ艦底通過ヲ示ス
① 回避魚雷ヲ示ス



註
数字ハ被雷箇所ヲ示ス

六 功 績

本戦歸於テ第遊撃部隊ヲ來襲シ敵機約二百五十機ノ内其ノ半数以上本艦ニ對シ攻撃ヲ集中セルモノ如ク本艦ハ恰モ被害擔任艦トナリタリ感アリ

從テ他艦ニ對シ被害ヲ局限シタルトナリ健全ナル第遊撃部隊ノ主力ハ翌十月二十五日「サマル」島東方海面ニ於テ敵機動部隊ヲ捕捉猛撃シ大戦果ヲ收ムルコトヲ得タリ

本艦ニ來襲セル敵飛行機一四機及ヒ本艦ニ近接シ敵飛行機ニ。機計六二機ニ對シ猛撃敢闘シ其ノ四五機ヲ撃墜シ敵ハ膽ヲ奪ヒ之ヲ擊退セリ然レドモ本艦ノ被害モ甚大ニシテ滿身創痕慘澹タル狀況現出セシモ乗員同擧艦一心トナリ自己ノ戦闘配置ヲ死守シ百方手段ヲ盡シ艦ノ運命ヲ救ハントシテ退カズ約四時間努力シ遂ニ沈没スルニ至リ配置ニ斃レタルモノ多数ヲ出セリ

且又當時便乗シ居リタル摩耶乗員ハ夫々固有戦闘配置ニ應ジ本艦

戦闘力ヲ増強ニ配備ニ就キ極メテ勇敢奮闘努力シ其功績顯著
トシテ了ラントテ特筆ス

上戦訓所見

(別紙 第二)

入戦死傷者表

(別紙 第三)

終